



ときひがの子

新時代「令和」の幕開け！

前天皇陛下が85歳で4月30日にご退位され、5月1日に59歳の皇太子様が新天皇にご即位されました。新天皇陛下は、「即位後朝見（ちょうけん）の儀」に臨み、「常に国民を思い、国民に寄り添いながら、憲法にのっとり、日本国および日本国民の統合の象徴としての責務を果たすことを誓い、国民の幸せと国の一層の発展、そして世界の平和を希望します。」

と、天皇としての最初のお言葉を述べられました。安倍総理も、「令和」を迎え、記者会見で、「明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせる時代であってほしい。」と述べられました。いよいよ新時代

「令和」を迎えました。「令」は「美しい・清らか」の意味があり、「和」は「争いをせずみんな仲よくする」の意味があります。常磐東学区の美しい環境の中で、子供たちが仲よく助け合い、一生懸命に勉強や運動に努力することが、幸せにつながると信じています。



東っ子 広い心で力強くはばたけ！

4月22日から青木川上空に鯉のぼりが泳いでいました。常磐東学区の名所の一つとして、多くの方が見学にられました。毎年、鯉のぼりを背景に全校で記念撮影をしています。大型サイズ（横25cm縦16cm）で文字入りの記念写真をあさひさんが学級で販売しています。詳しいことは各担任にご連絡ください。

5月6日、午後1時から鯉のぼりの片付けがはじまり、常磐中学生的生徒約15名が一生懸命に片付けを手伝っていました。本校の卒業生も7名ほど参加していました。話を伺うと、生徒会の呼びかけで、自主的に参加したようです。



4月誕生日会

4月の誕生日会は、4名の児童が参加しました。今年度最初の誕生日会です。



第2回自然観察教室「竹と竹炭の秘密を探る」

- 1 日時 令和元年5月13日(月) 8時15分～8時40分
- 2 場所 常磐東小学校校舎 2階 オープンスペース
- 3 内容 竹の活用と竹炭の効能について
- 4 講師 「おかざきの自然環境を考える会」代表 石原明夫様

ご講演に興味のある方は学校に電話(46-2108)などでご連絡ください。



【感謝します】5月7日から2日間かけて、峰澤さんと黒野さんが青木川の土手の草刈りを、ボランティアで刈ってくださいました。とてもきれいになりました。

刻々と設定変化 避難路を判断

「消火を手伝わんと!」「手
伝ってたら避難できないで!」

ることが多い。だが、校外で被
災することもある。子どもたち
が自分で判断できるよう、大島

生、地域住民も加わる。
近藤副校長は「自分で調
べ、考え、多くの人の関わり
の中で判断力、生きる力を付け
てもらおうのが狙い。考えて結論
を出すことが大事」と言う。

阪神大震災で被災した兵庫県
尼崎市。市立大島小学校で2
月、6年生(当時)約40人が教
室で地図を見つめながら、熱心
に意見をぶつけ合っていた。南
海トラフ地震を想定した「図上
避難訓練」と呼ばれる防災学習
の一コマだ。

想定では、市内は最大4級の
津波に襲われる。設定は、家族
がいない夜間に自宅で愛犬と
もに揺れに見舞われ、津波到達
までに避難するという内容だ。
担任の教師は、「通行止め」
などを踏まえて、生徒らは地図
を見ながら経路を考える。移動
できる距離は5分間に250

だ。周辺の斜面は崩れやすい花
崗岩で、学区内の85カ所が土砂
災害特別警戒区域に指定されて
いる。徒歩で1時間かけて通学
する児童もいる。東日本大震災
の後、地域の要望を受け、学校
が「地域防災」に率先して取り
組んできた。

理科、社会、国語、家庭科
の学習を盛り込む。6年生は
危険な場所を見つけて地図を作
り、学校のウェブサイトで公開
する。意識や備えを持つてら
おくと、学区の約340世帯に
毎年防災アンケートを配る。成
果は年一回、住民向けに発表。

避難生活のさまざまな困難を
紹介する展示もある。東日本大
震災後の避難所を再現したもの
もあり、「あなたならどうする
?」という視点を盛り込む。年
間3万人の小中学生が授業や修
学旅行で訪れるという。スタッ
フの石川緑さんは「災害時にど
う生き延びるかを学べる。日ご
ろの備えを考えるきっかけにし
てもらえれば」としている。

（鈴木智之、小林舞子）

自ら考えて行動

東日本大震災を機に、災害時に身を守るための学校での「学
び」の方法も転換期を迎えている。これまでの避難訓練のように
「受け身」ではなく、子どもたちが様々な場面を想像し、自ら主
体的に考えて判断できることを目指した取り組みが広がる。

様々な教科に防災を採り入れれ
ば、入り口が多様化し、子どもの
関心とも結びつきやすい。文科省
は、各教科を通して防災教育に取
り組むよう学習指導要領などで促
している。教科ごとの内容が互い
につながる工夫も求められる。
今年度から、大学の教職課程で
も防災を含む学校安全への対応が
必修化された。各地の教育委員会
や民間団体なども、防災教育に役
立つ様々な教材を提供している。
まず机の下に潜り、先生の指示
で整然と校庭に出る――。こんな
型通りの訓練で済ませるケースも
従来は多かった。しかし、地震は
机のある教室にいるときに起こる
とは限らない。近くに大人がいな
いこともある。
東京学芸大の渡辺正樹教授(安
全教育学)は「自ら危険に気付
き、安全な行動を取れるようにす
るのが震災後の流れ。先生も型に
はまることなく、想像力を働かせ
てほしい。教育委員会による支援
や、自治体や地域との連携も必
要」と話す。

通行止め・避難所満員・火災に直面

阪神大震災で被災した兵庫県
尼崎市。市立大島小学校で2
月、6年生(当時)約40人が教
室で地図を見つめながら、熱心
に意見をぶつけ合っていた。南
海トラフ地震を想定した「図上
避難訓練」と呼ばれる防災学習
の一コマだ。

想定では、市内は最大4級の
津波に襲われる。設定は、家族
がいない夜間に自宅で愛犬と
もに揺れに見舞われ、津波到達
までに避難するという内容だ。
担任の教師は、「通行止め」
などを踏まえて、生徒らは地図
を見ながら経路を考える。移動
できる距離は5分間に250

だ。周辺の斜面は崩れやすい花
崗岩で、学区内の85カ所が土砂
災害特別警戒区域に指定されて
いる。徒歩で1時間かけて通学
する児童もいる。東日本大震災
の後、地域の要望を受け、学校
が「地域防災」に率先して取り
組んできた。